

拘りと驕り

第11期OB 佐藤 和也

大阪からこんにちは。生まれ育った東京から大阪へ転勤になって4年目を迎えようとしております。仕事面では、金融業界で現在、最も成長産業と呼ばれている信託産業への注目が社会から集まっている一方、私の勤務先の社長が今年度から変わり、経営方針がガラリと変わった年度なのではないかと感じております。資産形成層への提案、富裕層への資産承継提案など、より一層高度な提案をするのを社会から求められており、毎日、刺激に溢れております。プライベート面では、第7期OG菊盛先生にお招き頂きまして、就活講演会に参加したり、あるいは、多くの小野ゼミ同期に再会し、学生時代の思い出話に花が咲くだけでなく、未来に向かって現在一途に取り組んでいる話を聞けて、有意義な1年になりました。

その中で、ある小野ゼミOB・OGに“コダワリがない佐藤和也で有名だったのに、変わったな”と言われて、ドキッとしました。彼曰く、変わったという言葉の真意としては、学生時代から知っている者としては、昔のコダワリがない佐藤が存在しなくなったことに対して寂しくある一方、人間として少しばかり味が出てきた、拘りがある佐藤の今後の展開には興味があるとか。思い返してみると、期初に行われる上司との面談時、“良い意味でも悪い意味でも佐藤は、仕事へのコダワリからか、好き・嫌いがはっきりしている、社内外に関わらず仕事ができない人に対してドライに接するよね”とのこと。学生当時、第11期同期である西本君のような車への拘り、伊礼君・石塚君のような女性への拘り、蓮岡さんのようなゼミへの拘りなど、変態の域に達しているかのようなそれらの拘りが、コダワリが全くない私にとって、羨ましく思っていました。そんな彼らに、私自身も、仕事上ではありますが、コダワリを拾い集めて、着実に拘りへと変化して、追いつけているのかもしれない。

しかし、拘りに執着しすぎて、驕りとか己惚れにならないようには気を付けたい。頭でっかちな人、頭が固い人と評される人は、得てして拘りに憑りつかれているような気がしてなりません。拘りと驕りの分岐点を見極めて、キャリアを積んでいきたい。そのような気付きを与えてくれる大阪の環境に感謝する、今日この頃です。



菊盛ゼミでの就活講演会に臨む著者



4年目の付き合いを迎える梅田支店同期と（著者は左側奥から2番目）



毎年恒例のインゼミ旅行@北海道（著者は右端）